

岡嶋 隆佑君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目：自由行為の哲学——初期ベルクソン哲学における時間と空間——

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授

同大学院文学研究科委員 斎藤慶典

副査 慶應義塾大学文学部教授

同大学院文学研究科委員 柏端達也

副査 学習院大学文学部教授 杉山直樹

副査 福岡大学人文学部教授 平井靖史

岡嶋隆佑君の博士学位請求論文は、19世紀末から20世紀前半にかけて活躍したフランスの哲学者ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の第一の主著『意識の直接与件についての試論』(1889年、以下『試論』) から第二の主著『物質と記憶』(1896年) への展開を、「自由行為」の概念の分析を中心に据えることで描き出そうとする意欲的な試みである。ベルクソン哲学における自由論の重要性はこれまでもたびたび指摘されてきたが、本論文はそうした先行研究に十分な目配りをした上で、自由行為についての哲学的探求こそが二著作の一貫した主題であることを明らかにしている。とりわけ『物質と記憶』で提示される時空論が、『試論』において素描された時間と空間の二つの概念に対して〈実践的な行為〉という観点からより厳密な規定を与えるものであるとする解釈は、ベルクソン哲学研究にとどまらず、自由や時空間に関する哲学研究一般に広く議論を提供するものとなっており、高い学術的価値を有する。

論文の構成

本論文は、序と5つの章、結語から構成されている。その全体の課題は、『試論』で事実として確認された自由行為が可能となるための条件の探求こそが『物質と記憶』の主題であることを示す点にある。本論文は、大きく前半部(1~2章)と後半部(3章以降)に分かれる。前半部では、上述の課題に応じる準備作業として、(1)『試論』で提示された自由行為概念の内実の明確化、(2)『物質と記憶』への移行期におけるベルクソンの思想変遷の検討、(3)二つの著作間に見したところ見受けられる矛盾の解消を行なう。後半部は『物質と記憶』の集中的な分析にあてられ、上述の課題をテキストの詳細な読解を通じて立証する。本論文の具体的な構成は以下のとおりである。

序

第1章：自由行為の事実——『試論』から1894年の講義まで

1-1：『試論』の諸概念

1-1-1：意識の諸状態

1-1-2：二つの多様体、持続と空間

1-1-3：自我の二つの相

1-2：自由行為とは何か

1-2-1：決定論

1-2-2：自由意志説

1-2-3：自由行為

1-3：カント哲学の観点から

1-3-1：『試論』と『純粹理性批判』講義

1-3-2：心理学講義——「自由」

1-3-3：『物質と記憶』解釈に向けて

第2章：常識と形而上学——『物質と記憶』の方法と出発点

2-1：二著作の一貫性

2-1-1：自由行為

2-1-2：常識

2-2：『物質と記憶』の方法論

2-2-1：常識から形而上学へ

2-2-2：なぜ常識が出発点となるのか

2-3：MMの出発点

2-3-1：实在論と観念論——「脳と思考」

2-3-2：常識の必然性

2-3-3：事実の線と懐疑

第3章：自由行為の可能性の条件——常識の認識論

3-1：諸概念の導出

3-1-1：知覚

3-1-2：情感

3-1-3：記憶

3-1-4：逆円錐

3-2：記憶と記憶力の二つの形式

3-2-1：習慣と出来事

3-2-2：習慣的記憶力と純粹記憶力

3-3：習慣的記憶力の諸相

3-3-1：自動的再認

3-3-2：運動図式

第4章：時空概念の改変と記憶の形而上学

4-1：行動の時空間

4-1-1：知覚における反射と時間的距離

4-1-2：行動空間

4-1-3：行動時間——「私の現在」①

4-2：純粹記憶の存在論

4-2-1：連合主義批判 ①

4-2-2：現在と過去の本性の差異

4-2-3：純粹記憶の残存

4-3：意識の諸平面の理論

4-3-1：連合主義批判 ②

4-3-2：意識の諸平面

4-3-3：注意的再認

4-4：『物質と記憶』の時間意識論

4-4-1：ジェイムズ『心理学原理』における「見かけの現在」

4-4-2：「私の現在」②

第5章：物質の形而上学

5-1：純粹知覚理論

5-1-1：知覚と情感——二つの距離

5-1-2：意識的全体としての物質

5-1-3：脳の役割——選別

5-2：収縮理論

5-2-1：『物質と記憶』における多様体の問題——質と量

5-2-2：三つの記憶力——心身の結合

結語——行為の形而上学に向けて

論文概要

序は、〈『試論』が自由行為の事実確認（自由な行為が事実として成立していることの確認）を行なうのに対し、『物質と記憶』はその条件の探求を行なう著作である〉という本論文全体の

仮説を従来の諸解釈と対比することを通して、本論文が先行研究に対して占めうる位置を定める。『試論』だけでなく『物質と記憶』においても自由が問題とされているという指摘自体は比較的初期の研究においても見いだされるが、「存在」という観点を強調したジル・ドゥルーズ『ベルクソニズム』（1966年）の見解がベルクソン解釈において支配的となって以来、自由行為という論点は見失われてしまうこととなった。フレデリック・ヴォルムス『生の二つの意味＝方向』（2004年）は、再び行為や「生」という論点を強調しているものの、ベルクソン哲学の大局的特徴づけにとどまっている。こうした研究史を踏まえるなら、二著作間に見られる移行の内実を解明した上で、とりわけ『物質と記憶』について自由行為という観点から一貫した詳細な理解を与える本論文は、先行研究に対して独自性を主張しうる。

第1章は、『試論』と同書刊行後1894年までに行なわれた二つの講義をコーパスとして、彼の用いる「自由行為」概念の内実の明確化を行なう。『試論』は、行為が伴う意識的な質の内に主体の自我が表現されていることを「自由」と呼び、その表現の度合いに応じて自由に程度を認めている。本章は、『試論』刊行後に行なわれたカント『純粹理性批判』講義と心理学講義の記録を検討することで、そうした自由と物質世界との結びつきを『試論』が示すことができていなかった要因は、習慣や記憶力、延長や空間といったいくつかの論点についての考察の不十分さにあると主張する。

第2章は、自由行為を二著作に一貫した主題と捉える際に想定される反論への応答を行なう。『物質と記憶』第一章の知覚論は冒頭から行為の選択可能性を論じているため、一見したところ、『試論』が「表現としての自由」という構想を提示する過程で明確に否定した「選択意志 (*libre arbitraire*)」を復活させているように思われるかもしれない。しかし本章は、テキストに詳細な解釈を与えることによって、そこで問題となっているのは『試論』が提示した「表現としての自由」を可能にする最も低次にして基礎的な段階の確認と、その条件の探求であるという解釈を提示する。

第3章は、『物質と記憶』全体の議論を自由行為の可能性の条件の探求として迎える作業を行なう。自由行為が可能であるためには、まずもって、複数の行為の選択肢が身体に対して提示されること、そしてそのようにして提示された選択肢の中から一つが選択されることが必要であるが、これらは大枠で言えば、順に、知覚論と記憶論に相当する。そこで本章はまず、前者における知覚の定義の検討を通じて、『物質と記憶』における主要な概念と理論——情感・純粹知覚・収縮・記憶——がどのようにして要請されることになるのかを示す。続いて、記憶論を扱う『物質と記憶』第二章に目を移し、〈習慣としての記憶〉と〈出来事としての記憶〉のそれぞれが主導する二つの「再認」の形態がそのまま行為の選択に際しての二つの方式となっていることが確認される。

第4章は、『物質と記憶』のテキストを横断的に検討することで、『試論』以後暗黙の内に

改変されていた時間および空間の概念に厳密な解釈を与える。まず、『物質と記憶』第一、第三章を中心に提示されている空間概念が、身体的な行為を基礎とする「行動空間」として規定される。続いて、この「行動空間」に反省を加えることで「等質的空間」が得られ、そこから一般に時間直線として表象されるような「等質的時間」が切り出されてくるさまが示される。さらに本章は、『物質と記憶』が暗黙の内に前提としているアメリカの心理学者ウィリアム・ジェイムズの『心理学原理』（1890年）の議論を参照軸として、ベルクソンの「持続」（「私の現在」）の本質は「行為の実現」であるとする解釈を提示する。

第5章は、自由行為を可能にする条件の一つである（選択肢の提示）という論点に関して、二つの形而上学的仮説——純粹知覚理論と収縮理論——を検討する。まず、純粹知覚理論においてベルクソンが物質全体の有する意識的な質に関わる主張を展開していることが示され、そうした全体からの「選別」こそ脳が果たしている役割であることを確認する。続いて本章は、「収縮（contraction）」という新たな記憶力とそれによって構成される多様体に関する議論の導入によって、『物質と記憶』はわれわれ人間の感覚質から物質的な質に至るまでの段階的な移行を捉えることに成功したとする解釈を提示する。最後に、以上の議論を踏まえて、『物質と記憶』の解釈上大きな争点となる三種の記憶力についての統合的な理解が提示される。

結語は、「行為の形而上学」に向けての展望を述べる。『物質と記憶』は、生ないし生活に完全に適合した人間に「良識（bon sens 常識）」を認めている。この観点から改めて『試論』の記述を読み返すなら、そこで最も高次の自由行為の典型として引き合いに出されていた事例は、まったく社会生活に適合したものでないことが気づかれる。しかし、そうした行為は、生ないし常識という拘束から解放されているという点で、かえって優れて自由な行為であると理解することができる。そうした水準における自由はカントが『実践理性批判』で示した行為の形而上学の問題に通じるものであり、これを詳細に検討するのがベルクソン最後の主著『道徳と宗教の二源泉』（1932年）である。こうした点を考慮するとき、自由行為という主題は、初期だけでなく最晩年に至るまでベルクソン哲学を一貫するライトモチーフであるという見通しを得ることができる。

審査概要

本論文は、一見したところさまざまな矛盾を孕んでいるように思われる『試論』と『物質と記憶』という二つの難解な著作を丹念に読み解くことで、初期ベルクソン哲学に対して〈自由行為の事実としての確認〉と〈その条件の探求〉という一貫した解釈を与えることを目指した水準の高い労作とすることができる。以下、三つの側面から、とりわけ注目すべき点を述べる。

第一に、初期ベルクソン哲学に対し、階層構造をもった自由論という明確な特徴づけを与えた点である。『試論』が自由を主題とした著作であることは、同書が英訳されるに際して「時間と

自由」という表題が与えられたことから明らかであるが、そこで問題となっているのは、人生の重要な局面での決断というような人間的な意味での自由だった。従来の研究はこの点を強調するあまり、『物質と記憶』に対しては心身問題の解明を通じて間接的に自由の問題に関与する著作という限定的な解釈を与える傾向が強かった。これに対して本論文は、『試論』で提示された「自由は程度を容れる」という主張の含意を慎重に吟味することを通して、『物質と記憶』の複雑な議論の内いくつかの水準を区別し、物質から生命、身体の自動的な運動から高次の意識における決断にまで至る階層構造をもった自由論をベルクソン哲学から析出することに成功している。

第二に、本論文が行なったテキスト分析の解像度の高さは、それ自体として評価に値する。ベルクソンの最初の二著作の間に見られる連続性と分断をめぐっては、これまで数多くの言及がなされてきた。しかし従来の研究は、『物質と記憶』における空間概念の変化や時間の本質に関わる「持続 (durée)」という彼固有の用語の後退という事実の指摘にとどまっており、さまざまな概念について『試論』の時期からそれらの内実に関してどのような改変がなされたのかという点を明らかにしてこなかった。本論文は、表面上の言葉遣いに囚われず、問題を事柄として適切な仕方で整理・限定することによって、「常識」や「情感」、「収縮」といった既存の解釈では曖昧さを残していたいくつかの概念について、極めて明快な定義を与えている。中でも、『試論』においては時間の空間化の文脈で否定的にしか扱われない「選択意志」という契機が、『物質と記憶』では生態学的な観点の導入に伴って、知覚と記憶の連関の内に積極的な仕方で位置づけ直されていることを明快に示した点は特筆に値する。

第三に、本論文は、ベルクソン研究に限定されず、広く現代の哲学に通じるいくつかの問題を提起している。具体的には次の二点が重要である。(1) 『物質と記憶』の知覚論と、ウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムに基づく心理学やジェイムズ・ジェローム・ギブソンの生態学的心理学との類似はすでに指摘されているところだが、この論点について〈身体の可能的行動が開く「行動空間」〉という観点から明確な理解を与える本論は、現代の空間論一般に対しても重要な論点を提供するものとなっている。(2) 自由に関する現代の哲学的議論は、自由概念の理解や決定論との両立の是非をめぐってさまざまな立場が乱立している状態にある。自由意志と決定論の対立を擬似問題とみなす『試論』の主張は、一見したところ、そうした議論の枠組みに位置づけることが困難であるように思われる。しかし、そこで同時に提示された「表現としての自由」という構想の及ぶ射程を最大限に見積ろうと試みる本論は、ホップズが主張したような(行為の妨げがないという意味での)消極的な自由とは異なる仕方で、決定論と両立可能な新たな自由論の可能性を提起している。

上記のように本論文は、その手法、着眼点、成果において高い学術的価値を有する論文となっているが、いくつかの点において今後の課題を指摘することができる。

第一に、上述のとおり、本論文の概念分析は非常に精緻なものであるが、そのことによってかえって、ベルクソン自身があえて余白を残していたいくつかの問題（「情感」や「記憶力」等）のもつ豊かな含蓄を縮減してしまっている恐れがある。それぞれの含蓄に対しても、それらを切り捨てることなく明晰な表現へともたらず努力が忘れられてはならない。第二に、本論文第5章で論じられているとおり、『物質と記憶』は、われわれの経験を構成する最も原初的な働きとして、多様な「物質＝質料 (matière)」を一つに取りまとめる「収縮」という働きを想定している。しかし、そもそも最初に与えられるのはすでに統一をもった現象的な意識なのだから、そこから遡及的に導出ないし析出される「収縮」といった働きやその対象となる「物質＝質料」の存在論上の身分についての考察が不可欠であるとするモーリス・メルロ＝ポンティやルノー・バルバラスら現象学者からの批判に対し、明確な応答を提示する必要がある。第三に、階層性を持った自由論としてベルクソン哲学を特徴づけた点は高く評価されるべきものであるが、それぞれの階層のさまざまな水準における行動ないし行為の起点は何／誰であるのか、さらには行為に表現される「自我」とは何かといった論点についての（とりわけ『物質と記憶』と『創造的進化』を中心とした）詳細な議論が不可欠である。この吟味なくして、一つの自由論としてのベルクソン哲学の有効性を正確に判定することはできないからである。

以上のようないくつかの課題を残しているが、本論文は内外の研究を踏まえつつも既存の研究にはない解像度をもった水準の高いベルクソン哲学研究として、また自由・空間・時間を主題とする密度の濃い哲学研究として高い学術的価値を有するものであり、審査員一同は本論が博士（哲学）の学位にふさわしいものであると判断する。